

# 月夜とめがね

小川未明

青空文庫



町も、野も、いたるところ、みどり緑の葉につつまれているころでありました。

おだやかな、月のいい晩ばんのことです。しずかな町のはずれにおばあさんは住んでいましたが、おばあさんは、ただひとり、窓まどの下にすわって、針はりしごとをしていました。

ランプの火が、あたりを平和に照らしていました。おばあさんは、もういい年でありましたから、目がかすんで、針のめどによく糸が通らないので、ランプの火に、いくたびも、すかしてながめたり、また、しわのよった指さきで、ほそい糸をよったりしていました。

月の光は、うす青く、この世界を照らしていました。なまあたかな水の中に、木立こたちも、家も、丘おかも、みんなひたされたようでもあります。おばあさんは、こうしてしごとをしながら、自分のわかいじぶんのことや、また、遠方のしんせきのことや、はなれてくらしている孫まごむすめ娘のことなどを、空想していたのであります。

目ざまし時計の音が、カタ、コト、カタ、コトとたなの上できざんでいる音がするばかりで、あたりはしんとしずまっています。ときどき町の人通りのたくさんな、にぎやかな巷ちまたの方から、なにか物売りの声や、また、汽車の行く音のような、かすかなとどろきがきこえてくるばかりであります。

おばあさんは、いま自分はどこにどうしているのかすら、思い

だせないように、ぼんやりとして、ゆめをみるようにおだやかな気持ですわっていました。

このとき、外の戸をコト、コトたたく音がしました。おばあさんは、だいぶ遠くなった耳を、その音のする方にかたむけました。いまじぶん、だれもたずねてくるはずがないからです。きつこころは、風の音だろうと思いました。風は、こうして、あてもなく野原や、町を通るのであります。

すると、こんどは、すぐ窓の下に、小さな足音がしました。おばあさんは、いつもにせず、それをききつけました。

「おばあさん、おばあさん。」と、だれかよぶのであります。

おばあさんは、さいしよは、自分の耳のせいではないかと思ひ

ました。そして、手を動かすのをやめていました。

「おばあさん、窓まどをあけてください。」と、また、だれかいいました。

おばあさんは、だれが、そういうのだらうと思つて、立つて、窓の戸をあけました。外は、青白い月の光が、あたりをひるまのように、明るく照らしているのであります。

まどの下には、背せのあまり高くない男が立つて、上をむいていました。男は、黒いめがねをかけて、ひげがありました。

「私はおまえさんを知らないが、だれですか。」と、おばあさんはいいました。

おばあさんは、見しらない男の顔を見て、この人はどこか家を

まちがえてたずねてきたのではないかと思いました。

「私は、めがね売りです。いろいろなめがねをたくさん持っています。この町へは、はじめてですが、じつに気持のいいきれいな町です。今夜は月がいいから、こうして売って歩くのです。」と、その男はいいました。

おばあさんは、目がかすんで、よく針のめどに、糸が通らないでこまっていたやさきでありましたから、

「私の目にあうような、よく見えるめがねはありますかい。」と、おばあさんはたずねました。

男は手にぶらさげていた箱のふたをひらきました。そして、その中から、おばあさんにむくようなめがねをよつていましたが、

やがて、一つのべっこうぶちの大きなめがねを取り出して、これを、窓から顔を出したおばあさんの手にわたしました。

「これなら、なんでもよく見えることうけあいです。」と、男はいいました。

窓の下の男が立っている足もとの地面には、白や、赤や、青や、いろいろの草花が、月の光をうけてくろずんで咲いて、におっていました。

おばあさんは、このめがねをかけてみました。そして、あちらの目ざまし時計の数字や、暦の字こよみなどを読んでみましたが、一字、一字がはつきりとわかるのでした。それは、ちょうど、いく十年前の娘のじぶんには、おそらく、こんなになんでも、はつきりと



目にくつつたのであろうと、おばあさんに思われたほどです。

おばあさんは、大よろこびでありました。

「あ、これをおくれ。」といって、さっそく、おばあさんは、このめがねを買いました。

おばあさんが、お金をわたすと、黒いめがねをかけた、ひげのあるめがね売りの男は、たち去ってしまいました。男のすがたが見えなくなったときには、草花だけが、やはりもとのように、夜の空気の中におっていました。

おばあさんは、窓をしめて、また、もとのところにすわりました。こんどはらくらくと針のめどに糸を通すことができました。おばあさんは、めがねをかけた、はずしたりしました。ちよう

ど子どものようにめずらしくて、いろいろにしてみたかったのと、もう一つは、ふだんかけつけないのに、きゆうにめがねをかけて、ようすがかわったからでありました。

おばあさんは、かけていためがねを、またはずしました。それをたなの上の目ざまし時計のそばにのせて、もう時刻もだいぶおじごくそいからやすもうと、しごとをかたづけにかかりました。

このとき、また外の戸をトン、トンとたたくものがありました。おばあさんは耳をかたむけました。

「なんとというふしぎな晩だろう。また、だれかきたようだ。もう、こんなに……。」と、おばあさんはいつて、時計を見ますと、外は月の光に明かるいけれど、時刻はもうだいぶふけていました。

おばあさんは立ちあがって、入り口の方に行きました。小さな手でたたくとみえて、トン、トンというかわいらしい音がしていたのであります。

「こんなにおそくなってから……。」「と、おばあさんは口のうちでいいながら戸をあけて見ました。するとそこには、十二三の美しい女の子が目をうるませて立っていました。

「どこの子かしらないが、どうしてこんなにおそくたずねてきましたか？」と、おばあさんはいぶかりながら問いました。

「私は、町の香水製造場こうすいせいぞうじょうにやとわれています。毎日、毎日、

白ばらの花からとった香水をびんにつめています。そして、夜、おそく家に帰ります。今夜も働いて、ひとりぶらぶら月がいいの

で歩いてきますと、石につまずいて、指をゆびこんなにきずつけてしまいました。私は、いたくて、いたくてがまんができないのです。血が出てとまりません。もう、どの家もみんなねむってしまいました。この家の前を通ると、まだおばあさんが起きておいでなさいます。私は、おばあさんがごしんせつな、やさしい、いいかただだということを知っています。それでつい、戸をたたく気になったのであります。」と、髪かみの毛の長い、美しい少女はいいました。おばあさんは、いい香水のにおいが、少女のからだにしみていとみえて、こうして話しているあいだに、ぶんぶん鼻にくるのを感じました。

「そんなら、おまえは、私を知っているのですか。」と、おばあ

さんはたずねました。

「私は、この家の前をこれまでたびたび通つて、おばあさんが、窓の下で針しごとをなさっているのを見て知っています。」と、少女は答えました。

「まあ、それはいい子だ。どれ、そのけがをした指を、私に見せなさい。なにか薬をつ<sup>くすり</sup>けてあげよう。」と、おばあさんはいいました。そして、少女をランプの近くまでつれてきました。少女はかわいらしい指を出して見せました。すると、まっ白な指から赤い血が流れていました。

「あ、かわいそうに、石ですりむいて切つたのだろう。」と、おばあさんは、口のうちでいいましたが、目がかすんで、どこから

血が出るのかよくわかりませんでした。

「さっきのめがねはどこへいった。」と、おばあさんは、たなの上をさがしました。めがねは、目ざまし時計のそばにあったので、さっそく、それをかけて、よく少女のきず口を、見てやろうと思いました。

おばあさんは、めがねをかけて、この美しい、たびたび自分の家の前を通ったという娘の顔を、よく見ようとしました。すると、おばあさんはたまげてしまいました。それは、娘ではなく、きれいな一つのこちようでありました。おばあさんは、こんなおだやかな月夜の晩には、よくこちようが人間にばけて、夜おそくまで起きている家を、たずねることがあるものだという話を思いだし

ました。そのこちようは足をいためていたのです。

「いい子だから、こちらへおいで。」と、おばあさんはやさしくいいました。そして、おばあさんはさきに立って、戸口から出たうらの花園はなぞのの方へとまわりました。少女はだまって、おばあさんのあとについて行きました。

花園には、いろいろの花が、いまをさかりと咲いていました。ひるまは、そこに、ちようや、みつばちが集まっています、にぎやかでありましたけれど、いまは、葉かげでたのしいゆめをみながらやすんでいるとみえて、まったくしずかでした。ただ水のように月の青白い光が流れていました。あちらのかきねには、白い野ばらの花が、こんもりとかたまつて、雪のように咲いています。

「娘はどこへ行つた？」と、おばあさんは、ふいに、立ちどまつてふりむきました。あとからついてきた少女は、いつのまにか、どこへすがたを消したもののか、足音もなく見えなくなつてしまいました。

「みんなおやすみ、どれ私もねよう。」と、おばあさんはいつて、家の中へはいつて行きました。

ほんとうに、いい月夜でした。



# 青空文庫情報

底本：「小川未明童話集」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年11月10日発行

1977（昭和52）年6月10日第40刷

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1922（大正11）年7月

※初出時の表題は「月夜と眼鏡」です。

入力：鈴

校正：小林繁雄

2012年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 月夜とめがね

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>